令和５年２月号

川越セントノア病院　〒350-1155 埼玉県川越市下赤坂２９０－２
TEL049-238-1160　FAX049-238-1162　https://www.saintnoah-kawagoe.jp

ノアの爽風（かぜ）

～目次～

- 病院短信『早期アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」』医師　佐々木　強
- 看護日誌　伊藤　義幸
- 作業療法科だより　寺崎　竜也
- 日常の一コマ　堀江　寛子
- 今月のナナ　『ナナの成長記録全編』

２月の予定

◆誕生日会　各病棟にて１４：００～
　１病棟：１３日　２病棟：１６日
　３病棟：１７日
◆節分　各病棟にて１４：００～
　１病棟：１日　２病棟：２日　３病棟：１７日

獅子舞

新年恒例の獅子舞がやってまいりました。
今年はミニ獅子舞も登場したようです。

今月のナナ

昨年の２月にナナはやって来ました!(^^)!
ちょうど１年です❣
ナナの成長記録をご覧ください(*^▽^*)

病院短信

医師　佐々木　強

『早期アルツハイマー病の新薬「レカネマブ」』

1月後半寒い日が続いていましたが、この記事を読まれている時は、暖かい日を迎えているでしょうか？

昨年10月から川越セントノア病院に内科医として勤めております佐々木です。春日部セントノア病院からの転勤となりました。両院は認知症専門の精神科病院であり、経験豊富な専門家スタッフが多数勤務されており、川越セントノア病院においても他のスタッフと共に診療に、御家族様の相談に対応できる事を心強く思っています。

最近認知症診療に携わる者にとって大変注目されるニュースがありました。1月16日、製薬会社のエーザイは開発を進めてきたアルツハイマー病の新薬「レカネマブ」を厚生労働省に承認申請したと発表しました。エーザイがアメリカのバイオジェンという会社と共同開発したものです。続けて1月30日には、優先審査品目に指定されたと発表しました。審査期間は通常品目では約1年のところ、優先審査品目では約9ヶ月のようです。今年の秋には認可が期待されます。

レカネマブは治験といわれる第Ⅲ相試験がグローバル（アメリカ、アジア、欧州）で実施され、結果が昨年秋にアルツハイマー病臨床試験会議に発表され、論文が世界トップの医学雑誌に掲載されました。

アルツハイマー病患者の脳内にはアミロイドベータという異常なたんぱく質が蓄積され、これによって脳の神経細胞が壊れ、認知機能が低下するとされています。そこでアミロイドベータの人工的な抗体を作成し、体内でこれをアミロイドベータに結合させ、免疫細胞で分解させ取除こうと開発したのがレカネマブです。

治験の結果は、1年半後の認知機能低下が27パーセント抑制され、症状の進行を遅らせる有効性が確認できたというものです。またアミロイドPETというX線を使わないCTで脳内のアミロイドベータ蓄積量を大幅に減少させることが確認されました。

これまでも、世界中の研究機関や製薬会社で脳内の異常なたんぱく質の除去を狙った薬が開発されてきました。いくつかは期待をもって臨床試験に移されましたが認知機能低下の抑制を証明できませんでした。その意味でレカネマブがこの効果を明確に示したのは画期的なことです。（アデュカヌマブというレカネマブと類似の発想で開発が先行された薬が試験を継続されています。）

残念ながら手放しで喜べない点がいくつかあります。

①一度壊れた神経細胞をもとに戻すことはできません。効果が示されたのは早期アルツハイマー病です。

②アミロイドベータを標的とした治療法なのでアミロイドベータ蓄積が前提となります。この蓄積の証明は高価で数少ない検査機器（アミロイドPET）か身体的に負担の掛かる検査で行われます。

このレカネマブはアルツハイマー病治療のブレイクスルーになると期待されています。更に他の製薬会社からもアミロイドベータを標的とした新薬の治験結果が米国で年内に出る模様です。

最後に、初代理事長が医療と福祉の融合を目指し、初めに開院されたこの川越セントノア病院で勤務するにあたり、改めて患者さんの穏やかに過ごされる時間が少しでも多くなるよう努めて参りたいと思っています。

どうぞ宜しくお願いします。

看護日誌

2病棟　看護師　　伊藤　義幸

入職し１年が経ちました。コロナ流行から３年、コロナ前は週３日運動をしていましたが、約２年運動せず食べるだけの生活をした結果、体重増加・体力減少・気力低下し、老いを感じています。行動制限のない年末年始が過ぎましたが、新しい変異株の話もあり、第８波が続いています。スポーツ観戦も好きで以前はよく行っていましたが、今は控えています。早く以前の生活に戻れるように願うばかりです。

日常の一コマ

今月は３病棟の富江さん（８６歳）の一コマです。富江さんは長野県出身で４人姉妹の４番目に生まれました。そして２７歳の時にお見合い結婚されました。実は富江さんのご主人は１１月号の一コマでご紹介した光三さんです。ご結婚後は光三さんの生まれた川越市に移り、２人の息子さんにも恵まれ、富江さんは紡績会社で長期間パート勤務をなさっていました。

平成２５年富江さん７７歳頃からご主人の光三さんの物忘れが始まり、光三さんの通院に付き添い、２年が過ぎた頃に念のためということで認知症の検査をしたところ、光三さんよりもアルツハイマー型認知症が進んでいるとの診断を受けました。ご家族は富江さんが認知症とは全く気付かなかったそうです。在宅生活は難しく、光三さんは当院へ富江さんは施設へ行くことが決まりました。平成２８年８０歳で施設に入所した富江さんは、定期的に病院受診のために入所と退所を繰り返していました。令和２年８４歳時に転倒し、大腿骨骨折で手術を受け施設に戻りましたが認知症も進行しており、理解力低下・徘徊・昼夜逆転・夜間不穏・不潔行為などが見られるようになり、施設での対応も困難とのことで、息子さんは「これからの日々を夫婦で一緒に過ごさせてあげたい」と当院への入院を希望され、令和３年１２月、当院にご入院されました。久しぶりの夫婦再会の日、大切な時間をと富江さんに不安がないよう食事席を光三さんの隣にしてお迎えしました。光三さんは笑顔でしたが何故か落ち着かない様子で立ったり座ったり・・。富江さんは話しかけるでもなく、微笑みながら光三さんを見つめていました。その後の富江さんは、微笑みを絶やさず、食事の時間前には「ご飯の準備をしなくちゃね」といつも周りを気にかけてくれます。作業療法にもニコニコと楽しく参加されています。その様子は、息子さんが富江さんについてお話ししてくれた「優しくて、穏やかで時に頑固な母でした」そのものです。ご夫婦の穏やかな日々が続くようこれからも支援していきたいと思います。

３病棟　看護主任　　堀江　寛子

作業療法科だより

作業療法士　寺崎　竜也

去年の秋頃から「お花紙ピクチャー」という作業を始め、多くの患者様にお手伝いをしていただきました。その名前の通り、お花紙を丸めた玉を並べて、一つの絵を作ります。今回は、令和５年の干支である「うさぎ」を模した作品にしました。作業を開始し、徐々に形が表れていきます。時々談笑しながらも作業は滞りなく進み、遂に年末に素晴らしい作品が完成しました。現在、１階の談話室に飾ってあります。お時間があれば、ご観賞していただければと思います。